

奥利根 幽ノ沢～幽ノ沢山～小穂口沢オクサビ沢

佐貫

【日時】 2008年10月11日(土)～13日(月)

【メンバー】L佐貫、木下、山川、大野

10月連休は奥利根のちょっとマイナーな沢、というのが秋になる前から頭にあった。メンバーも自ずと決まり、やはり、というか案の定今年の夏合宿の4人である。私は奥利根には「奥利根でもいいよ」ではなく「奥利根のこの沢に行きたい」という人としか行かないと決めているので、幽ノ沢に行きたいというメンバーが集まったことで行く前からこの山行はある意味成功したようなものだと思った。残念なのは膝の不調で手嶋さんが参加できなくなったことだ。幽ノ沢はさほどの難溪とは考えにくい、オクサビ沢も全く下降向きの沢というわけでもなさそうなので、それなりに手こずるところが少しあるかな？というのが事前のメンバーの見立てであった。政治日程に翻弄される大野さんもギリギリ参加可能となり、残り3人も順調に集合、初日はともかく次第に好転しそうな予報と、材料は揃った。さあ連休の幕開けだ。

矢木沢ダムに近づくにつれ、空の色はどんどん暗くなっていった。今日も元気な高柳さんの船で幽ノ沢出合まで送ってもらう。10分も乗らないうちに雨がばらつきだし、皆の表情もさらに曇る。しかし幽ノ沢に入渓してみると水量は少なく、「脛より上は濡らさないで行けるかな？」と甘い算段をしてしまう。すぐにカワゴ沢を分け、タカクラ沢、越路沢との出合あたりまでは平瀬で兩岸にはブナやミズナラの森が広がり、昨年遡行した四番手沢を思い出させる風景だ。「白枯れのミズナラの根元には舞茸が・・・」との教えを受けたので、それらしい木を見るとつい段丘に駆け上がってしまうが、悲しいことに何も見つからない。それどころか、ゴミ沢と地形図に記されている沢を分けてからは水量が妙に増えてきて、濁りすら認識されるようになってしまった。雨の降り方は大したことはなく、「パラパラ降っている」という程度なのだが、源頭部ではかなりの雨量ということなのだろうか？腑に落ちない気持ちでどんどん水量が増す沢を遡行していく。木下さんは上流から流れてくる落ち葉を見たそうだ。

「くにぎかいの山と谷」で落ノ沢という名(仮称)を与えられた沢の手前あたりから、本降りに近い状態になってきた。「藤岡Pが中尾ツルネを登ってきてる証拠だね」と力なく笑いつつ、地形図に「長倉沢」とある沢を過ぎた所の3m滝から始まる連瀑帯に入る。3mから8m程度の滝の連続だが、それでも腰までつかったり巻いたり。天気



増水の沢を行く

せいで映えないだけで、幽ノ沢の溪相は四番手沢に似た明るい白い滝の続く実に美しいものである。4mの滝ではヌメリをたわしで落として大野さんが突破。通常の水量、あるいは晴天であればほとんど水線通しに突破できそうな軽妙な滝登りの楽しめるところであろう。しかし残念なことに、刻一刻と増水はひどくなり、1人目と4人目では同じ滝でも水の流れが違っているような有様。五連瀑の巻きの途中に見下ろしてみると沢幅一杯に泡立った流れが暴れ狂う始末で、奥利根にはそれなりに通ってきた私たちも天候の様子や溪相、沢の集水面積を考慮してもここまでの大增水になることが不思議に思えてならなかった。



上流部は滝また滝

当初から幕場適地は 1250m 付近以外にないのではと心配していたが、連瀑帯を巻き終わったところが藪の中の平地になっているのを木下さんが発見。もう少し上の広河原も探してはみたものの、増水に耐えられる平らな場所もなく、先ほどの現場に決定。ビショヌレでテントに入り、お茶など沸かして飲んでいるとテントの中は湿気でホワイトアウト状態。水溜りもできてしまい、これじゃ早くも雪山の予行演習だ！でも着替えたり食べたりしていると何だか落ち着いてきて、翌日の天候回復を願いつつよく寝た。

翌日、歩き出してみると水量は1/4程度に減っている。支流を2本過ぎ、沢が右に急に屈曲するとそこからは見事に滝また滝が連なっていた。最初は左手の草付から巻き気味に登り、大滝は中段から落ち口までが悪いのでワンポイント、木下さんが補助ロープを引く。その先の7m滝は、右壁から山川リード（出だしがちょっと細かい）。ゴーロがなく、ほとんどが登れる滝で高度を上げていくのでとても楽しい。源頭部での細かい分岐はおおむね右へとり、もうすぐ10時というあたりで水を汲んで小休止。最後は根曲がりの藪を漕ぎ、幽ノ沢山と高クラの間の鞍部に出るつもりだったが予定よりも幽ノ沢寄りに進んでいたようだ。気持ちの良い、きつね色の小さな草原までは水が消えてから約1時間と行ったところか。

幽ノ沢山の山頂は、小沢岳や国境稜線の山々、燧や平ヶ岳、剣ヶ倉などかつてトレースしたお気に入りの山並みが見渡せる極上の展望台であった。無雪期と残雪期合わせても1年間に何人がここに立つか？という想像を皆でしてみる。あまりに悲惨だった昨日のビショビショのテントの中から一転して、秋の青空の下で静かな自分達だけの奥利根を満喫するこの幸せ感は、言葉にならない。笑顔の山頂写真を撮り、南東方向にベロを少し進んでからオクサビ沢への下降を開始する。下り始めてみると、左手前方



幽ノ沢山山頂にて



には小穂口沢本沢の大滝がはっきりと見え、自分達が奥利根の秋の懐深くに飛び込んでいくような気がする。オクサビ沢の源頭部はスラブが出てくるのではないかと心配していたが、意外に斜度の緩い藪と下降向きの沢が続き大分距離を稼ぐことができた。しかし10m滝を皮切りに3回、懸垂で下りる滝が現れる。標高1200mを切るあたりがこの沢唯一の幕営適地が見出せるところではないかと考えていたので、最後の懸垂のときに100mほど先に見えた緑の台地に期待したものの、近寄ってみると傾斜していて不向き。更に数分下降してみると、先頭の木下さんが小躍りして平坦地を指差している。そこは、砂地の焚き火スペースから3m以内に3日分はありそうな流木の山と、期待よりもずっと広い平坦地のコンビネーションだった。決まりだ。

キノコが諦められない大野さんは荷物を置いてから探しに行ったが、何も見つからず。しかし十三夜の月が青く光り、焚き火は盛大に燃えている。計画通り幽ノ沢山のピークに立てたという満足感もあり、キノコがなくても十分にトリップしそうな夜だった。

最終日は、オクサビ沢中流～下部のゴルジュという宿題がまだ残っているため、6時半に出発。間もなく両手がつく狭さのゴルジュが冷たそうに現れた。2mもない小滝を朝っぱらからかなり濡れつつ下り、ちょっとしたリッジから右岸の藪に上がって大高巻き開始。もしかしたら水線通しに行っても多少懸垂する程度で済んだかもしれないが、まあ一気に巻いてしまおうということで小さな尾根を越えて1時間強藪を漕いだ。再び沢に降り立ってみると、小穂口沢本沢との出合は近い。心なしか水量が多く感じられる本沢は、闊達で陽射しがキラキラ。バックウォーターまでの間に何とかナメコや舞茸にお目にかかりたく、しつこく段丘に上がって倒木を探しながら歩くが、ここでも成果はなし。マッチ棒の先端かエノキ茸の頭くらいのサイズのナメコの幼菌しか見つからなかった。木下さんがきれいなブナハ리를大量に発見したほかは、小穂口ならと楽しみにしていたキノコ類にまったく恵まれなかったのは残念なり。



オクサビ沢への下降

バックウォーターに約束の時間よりも早く来てくれた高柳さんに、湯の花温泉があった場所やマイタケの出るミズナラの見分け方を教えてもらい、途中の沢で寄り道してクリタケを採ったりしながらダムサイトへ。奥利根の溪と山と神様に再訪を約束して、錦秋の3日間が終わった。次は〇〇沢か、××沢か、どこへ行こうか。

【グレード】通して3級上

【行程】

- 10/11 幽ノ沢出合 (9:10) - ゴミ沢出合 (10:23) - c 1230付近幕場 (13:55)
- 10/12 出発 (6:35) - 幽ノ沢山 (11:35/50) - オクサビ沢c.1200下幕場(14:55)
- 10/13 出発(6:30)-小穂口沢出合(9:35)-バックウォーター(11:50)

【地形図】奥利根湖

